岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第 III 報）

－本郷・戸入のわらべうた－

高　木　靖　弘
小　川　悦　子

An Interim Report on the Oral Literatave of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture. (III)

－ The WARABEUTA in Hongo: Tonyu －

Yasuhiro Takagi
Etsuko Ogawa

We have investigated on the oral literature, wishing the creation of culture for the sound development of children.

In this paper we report on the WARABEUTA in Hongo: Tonyu, Tokuyama Mura.

1　は　じ　め　に

ここに報告する「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第Ⅲ報）―本郷・戸入のわらべうた―」は，同標題第Ⅰ報（聖徳学園女子短期大学紀要第五集所載）及び，第Ⅱ報（滋賀県立短期大学紀要第20号所載）につづくものである。今回は，本稿第Ⅲ報につづき，第Ⅳ報―戸入の昔話―（本号所載），第Ⅴ報―昔話“桃太郎”を中心に―（滋賀県立短期大学紀要第21号所載）として同時に報告する。

今回の調査は，前回にひきつづき徳山村本郷地区，戸入地区に入り，更に門入地区にまで足を伸ばした。期間は，本年８月８日より同月10日まで，及び９月９日，10月７日の延べ５日間，採集対象者は，一部は前回と重複する方々もあるが，８人の方々に会い，むかし話，わらべうたを採集した。ただし，門入地区については，次回に報告することとする。

なお，今回の調査で，本郷地区，戸入地区の子どものあそびとわらべうたも採集出来たが，この報告はまた別の機会にまとめるものとする。

I

＜調査地域及び，期日＞

本郷地区

1979年8月8日　午后7：30～9：30
1979年8月9日　午后7：30～9：00
〃　9月9日　午前10：00～12：00
〃　10月7日　午后2：00～4：00
いずれも斉藤一雄氏宅にて

話者・演唱者

斉藤一雄・斉藤みのえ・斉藤ひろえ・江口いとえ・北村秀子

戸入地区

1979年8月9日　午后1：00～4：00
〃　9月9日　午后1：00～3：00
いずれも増山たづ子氏宅にて

話者・演唱者

増山たづ子・山本花枝

＜話者・演唱者＞

冬の間，深い雪に埋もれる徳山村の人々の生活の中で，若い未婚の女性の多くは，秋の獲り入れがすんだ11月から翌年5月2日の八十八夜までの半年間，岐阜・大垣・名古屋・遠くは東京・大阪までも繊維労働者として，結婚するまでは毎年働きに出るのが常であったという。そうしたことを八十八夜工と呼んでいた。そうした八十八夜工の女性の多くも結婚は必ず村へ帰ってして居り，都市部に定住する人は滅多に居なかったとのことである。その例にもれず，今回お話を伺った内で4人の女性は，若い頃八十八夜工の経験をもっていた。

次に，話者・演唱者の簡単な経歴を記す。ただし，第Ⅰ報既報の増山たづ子氏，山本花枝氏については省略する。

斉藤みのえ氏　1905年（明治38年）4月10日生

本郷に生れ，本郷に在住，13才より21才で結婚するまで，大阪岸和田，東京都王子等へ八十八夜工として出稼ぎに出た。斉藤一雄氏と結婚し，以来，家業の豆腐製造小売業を営んだ。

昔話しは，祖母や母親から聞いたが，うたは，誰ともなしに，子どもの頃，遊んでいて覚えたと語った。

江口いとえ氏　1903年（明治36年）2月10日生

本郷に生れ，本郷に在住。斉藤一雄氏の妹，14才から19才で結婚するまでみのえ氏同様八十八夜工として都市部へ出稼ぎに出た。結婚して家業は農業を営む。10人の子をもうけたが，第二次大戦で2人の息子を失い，4人の子を若くして病死で失っている。

斉藤ひろえ氏　1907年（明治40年）2月15日生

本郷に生れ，本郷に在住，斉藤一雄氏の妹，家業は酒類販売業を営む。前述の2人と同様若い頃は八十八夜工の経験をもつ。

北村秀子氏　1927年（昭和2年）9月9日生

斉藤一雄・みのえ夫妻の長女として本郷に生る。昭和22年本郷出身者と結婚。以来東京に在住，母みのえ氏から昔話，わらべうたを聞かされてそのうたを今だに覚えているとのこと。今回はたまたまお盆で実家に帰っている折にお会いした。

＜採集・採譜について＞

この報告をまとめるにあたって，採集及び・採譜方法，記譜に際しての書式などはすべて第Ⅰ報でとった様式を踏襲した。曲の番号は，第Ⅰ報からの続き番号とし，採集地別，採集順に列記した。ただし，第Ⅰ報では説明と楽譜が離れていて見難かったので，曲ごとに，歌詞の前に楽譜を挿入した。

ここに収録したわらべうたは，本郷地区14曲，戸入地区４曲，計18曲である。大部分はすでに過去に於て採集されているが，演唱者は全く違い，今までに採集されたことのない曲も２曲採集することが出来た。

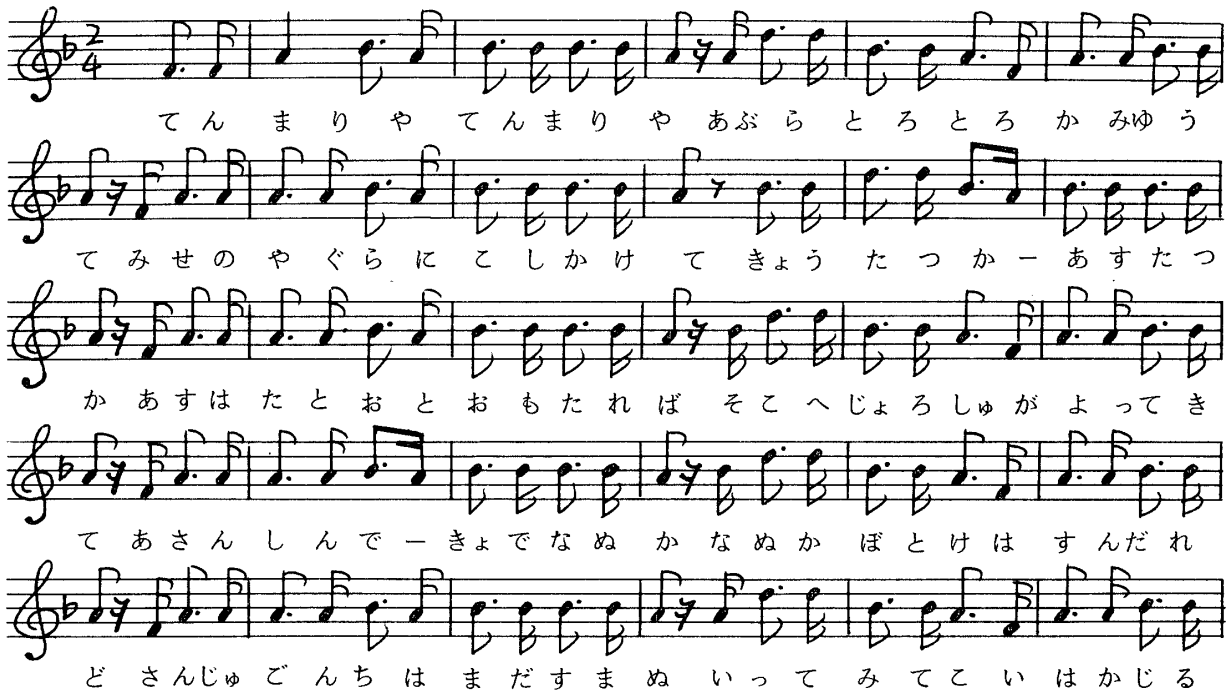
曲ごとに，旋法，注釈，類歌など解説を試みた。

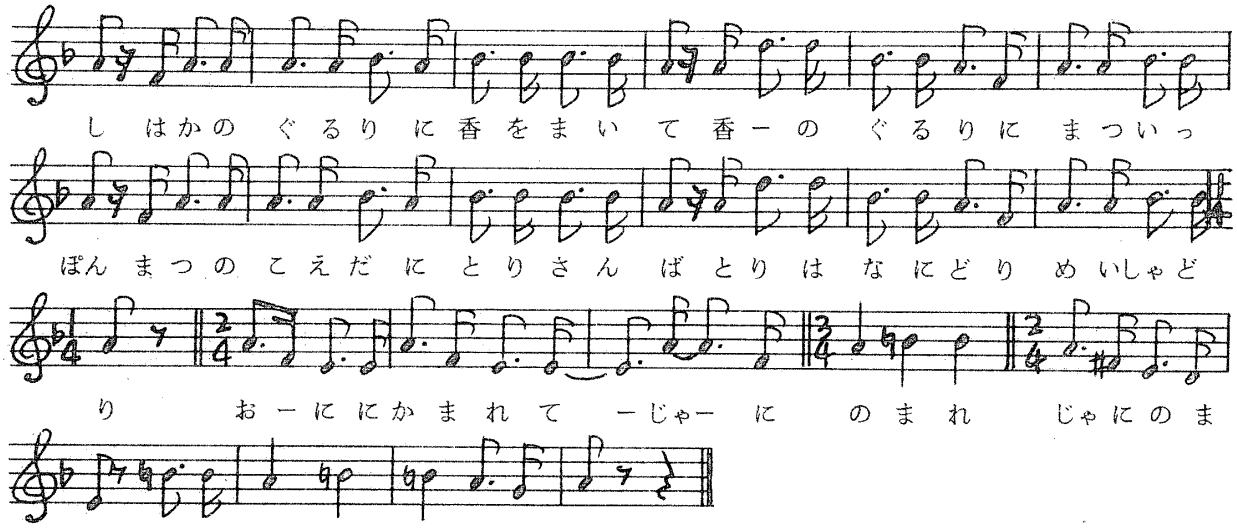
Ⅱ

＜本郷地区のわらべうた＞

6. てんまりやてんまりや　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ・斉藤ひろえ・江口いとえ





（出発点音嬰ヘ，速度M. M. 126　採譜高木）

歌詞

てんまりやてんまりや，油とろとろ髪結うて
店のやぐらに腰かけて，今日発つか明日発つか
明日は発とうと思たれば，そこへ女郎衆が寄って来て
朝ん死んで今日で七日，七日仏は済んだれど
三十五日はまだ済まぬ，行って見て来い墓じるし
墓のぐるりに香をまいて，香のぐるりに松一本
松の小枝に鳥三羽，鳥はなに鳥※めいしゃどり
鬼にかまれて蛇にのまれ，蛇にのまれ
ちょと一かんわいた

※めいしゃどり……どんな鳥か分らぬとのこと。

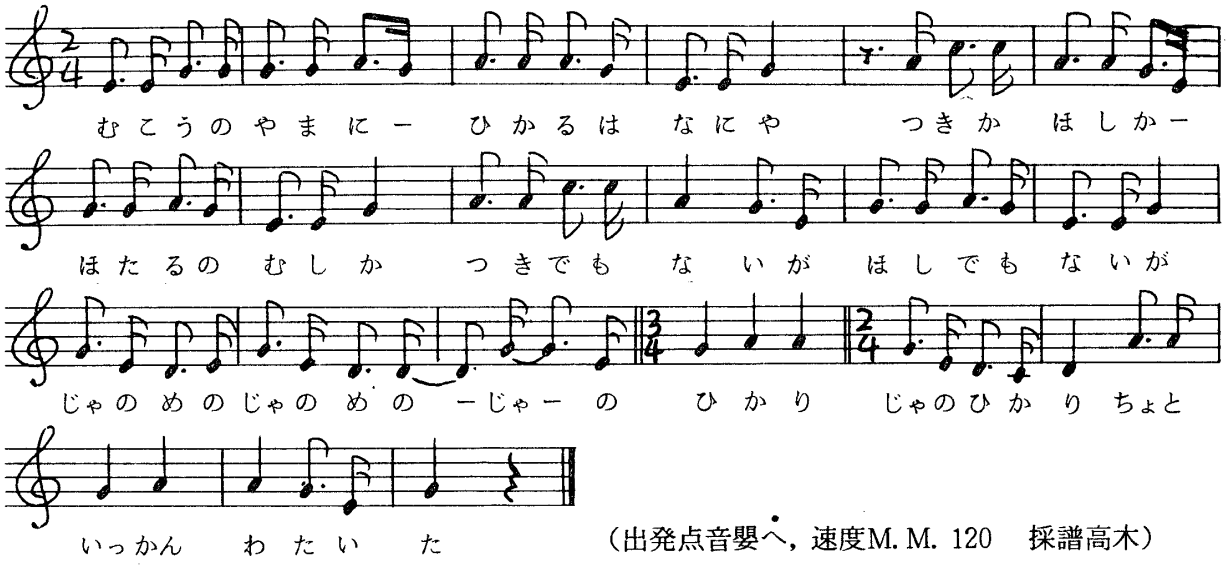
この曲の旋法は明らかな陰旋法で歌われている。一人だけではなく，三人の斉唱であったが，三人とも全くといっていい程同じ節まわしで歌った。ド，ミ，ファ，ラ，シ，の音列から成り，核音はミ，曲の大半は同じ節のくり返しで，最後の6小節程の部分で陽旋法に転調している。

詞は，それぞれ一節づつの言葉としては理解出来るが，歌全体としての大意は理解し難い。しりとり歌的な部分もみられ，また，語呂合わせ的な部分もみられる。

「てんまりさんはよい子でないか，よい子でのうて……以下略」[(1)]（本郷）「てんまるやてんまるや，あぶらとろとろ……以下略」[(2)]（門入）「てんまりやてんまりや，てんにおびこうてはりこんで……以下略」[(3)]（山手）と同じ徳山村内でも類歌がみられる。しかし，大よその旋律は似ているものの，詞に於ては大巾に違って来ている。徳山村に於ては過去に未採集の曲である。

7.　向こうの山に光るは何や　（てまり唄）

演唱者　斉藤ひろえ



（出発点音嬰ヘ，速度M. M. 120　採譜高木）

歌詞

向こうの山に光るは何や，月か星か蛍の虫か

月でもないが星でもないが，

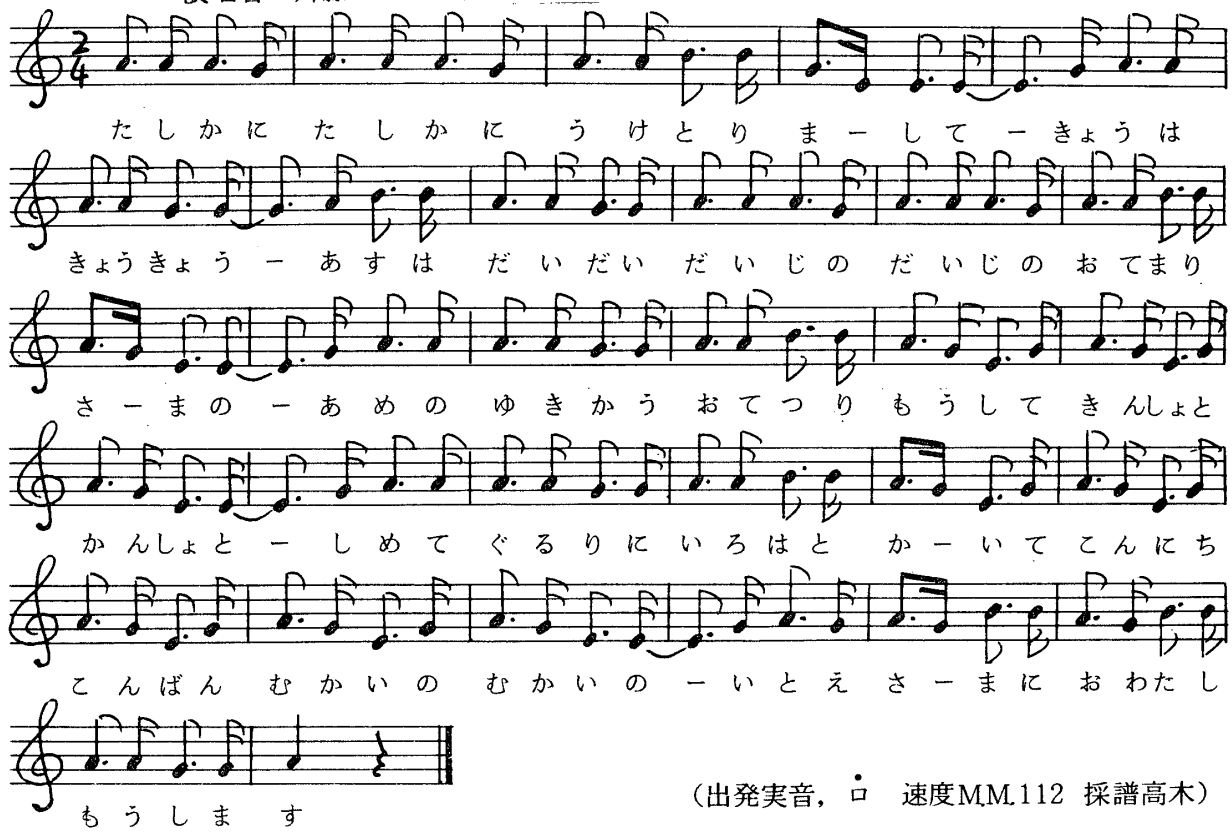
蛇の目の蛇の目の，蛇の光蛇の光

ちょと一かんわたいた

旋法は，レ，ミ，ソ，ラ，ド，の陽旋法，核音はソ，後出の11，「れんげの花と」のうたの途中部分から歌い出したものと思われるが，旋律も多少違い，詞も，てまり唄としてここから歌い出しても，ことさら不自然には感じられない。一つの曲としてとり上げた。

8.　たしかにたしかに　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ・江口いとえ



（出発実音，ロ　速度M.M.112　採譜高木）

歌詞

たしかにたしかに受けとりまして

今日はきょうきょう，明日はだいだい

だいじのだいじのお手まりさまの

※(1)あめのゆきかうお手つり申して

※(2)きんしょとかんしょと，しめてぐるりにいろはと書いて

こんにちこんばん，向かいの向かいのいとえさま（相手の名前）に

お渡し申します。

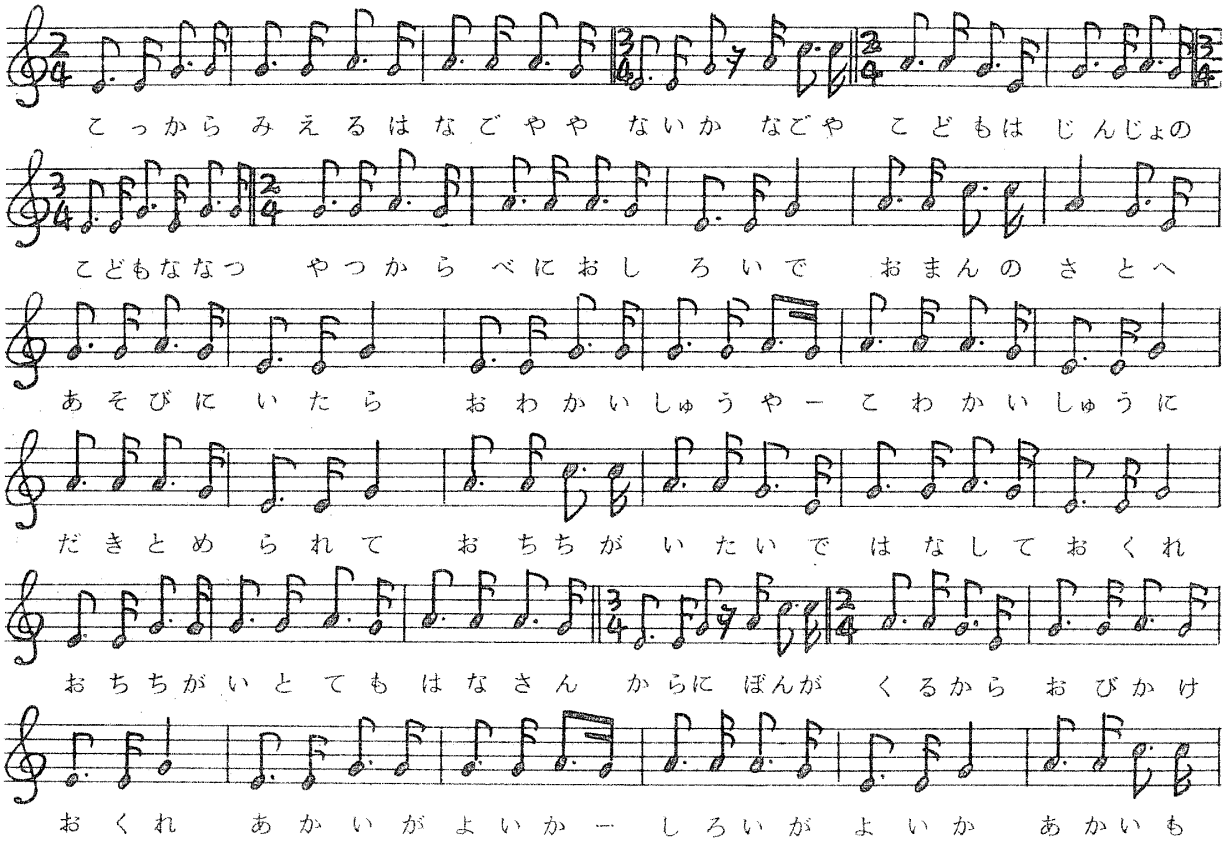
※1.2.……意味不明

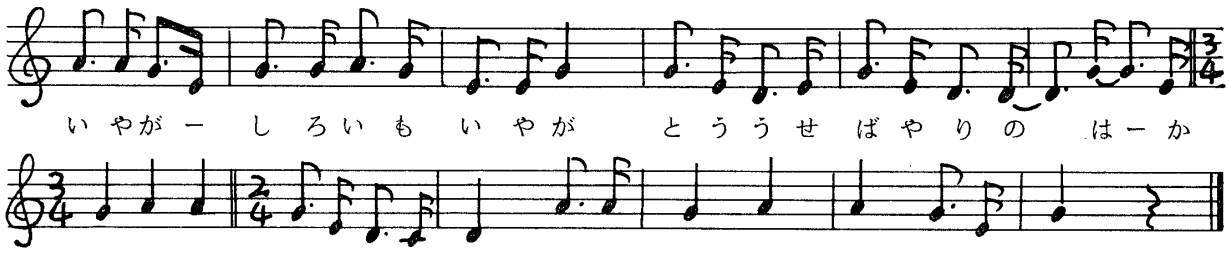
この曲は，ミ，ソ，ラ，シ，の四つの音のみの音列が使われている。ミ，ソ，ラ，のテトラコードにシの音が加わったものと解せられる。核音はソ。

相互に渡し合うまりつき唄で，相手の名前を歌いこむようになっている。この様な遊び方から，類歌は全国的にみられ，「渡しょ渡しょ……」「受けとった受けとった……」(4)「うけとったぞえ，もろうたぞえ……」（恵那郡加子母村，田口喜美枝・採譜高木）の様にいたる所に見出される。また同歌は，徳山村山手地区にて採集(5)されている。

9. こっから見えるは　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ





（出発実音嬰ヘ　速度M. M. 112，採譜高木）

歌詞

こっから見えるは名古屋やないか，名古屋子どもは※じんじょの子ども
七つ八つから紅（べに），おしろいで，おまんの里へ遊びに行ったら
お若い衆や，こ若い衆に抱きとめられて，お乳が痛いで離しておくれ，お乳が痛（いと）ても離さんからに
盆が来るから帯かけおくれ，赤いがよいか白いがよいか，赤いもいやが白いもいやが
当世ばやりの博多帯，博多帯，ちょと一かんわたいた。

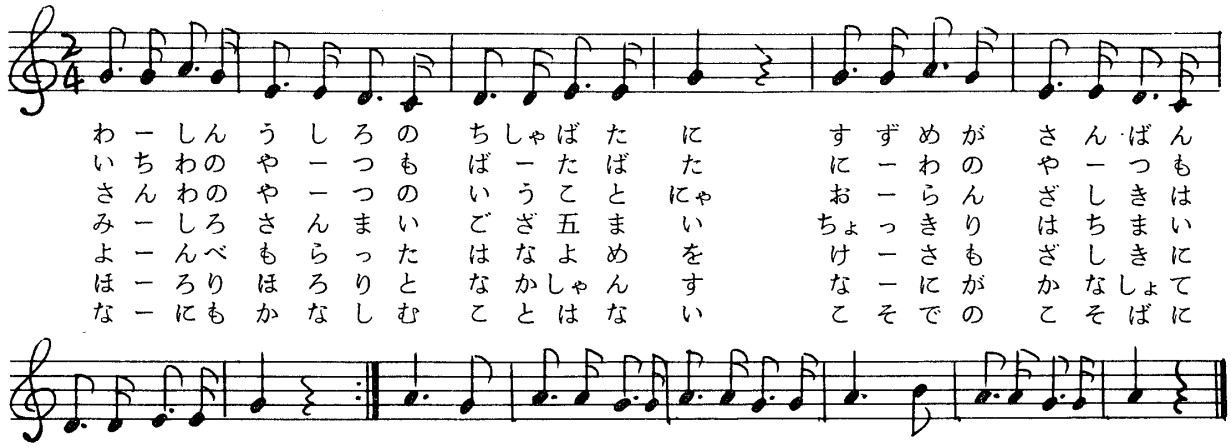
※じんじょの子ども……意味不明，尋常か？演唱者は，上品な子どもと解していたとのこと。

旋法は，ド，レ，ミ，ソ，ラ，の陽旋法で，核音はミとソである。

同歌が村内山手地区[6]，門入地区[7]に見出される。ただし門入地区のうたは，歌い出しが「てんまるやてんまるや……以下略」で始まり，途中，「お若い衆や，こ若い衆……」以下同歌となっている。このことについては，後段で，伝承形態について比較，検討を加えてみる。

10. わしんうしろの　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ



（出発実音ヘ　速度M.M.　120　採譜高木）

歌詞

わしんうしろのちしゃ畑[※1]に，雀が三羽んたちおりて
一羽のやつもばたばた，二羽のやつもばたばた
三羽のやつの云うことにゃ，おらん座敷は小さいけど
みしろ三[※2]枚，ござ五枚，ちょっきり八枚敷きつめて
よんべ貰[※3]った花嫁を，今朝も座敷につれといて
ほろりほろりと泣かしゃんす
何が悲しょて泣かしゃんす，何も悲しむことはない
小袖のこそばに血がついて，血かと思ったら紅やった紅やった

※1…ちしゃ畑…蒿苣(ちしゃ)畑，野菜の一種

※2…みしろ……むしろ

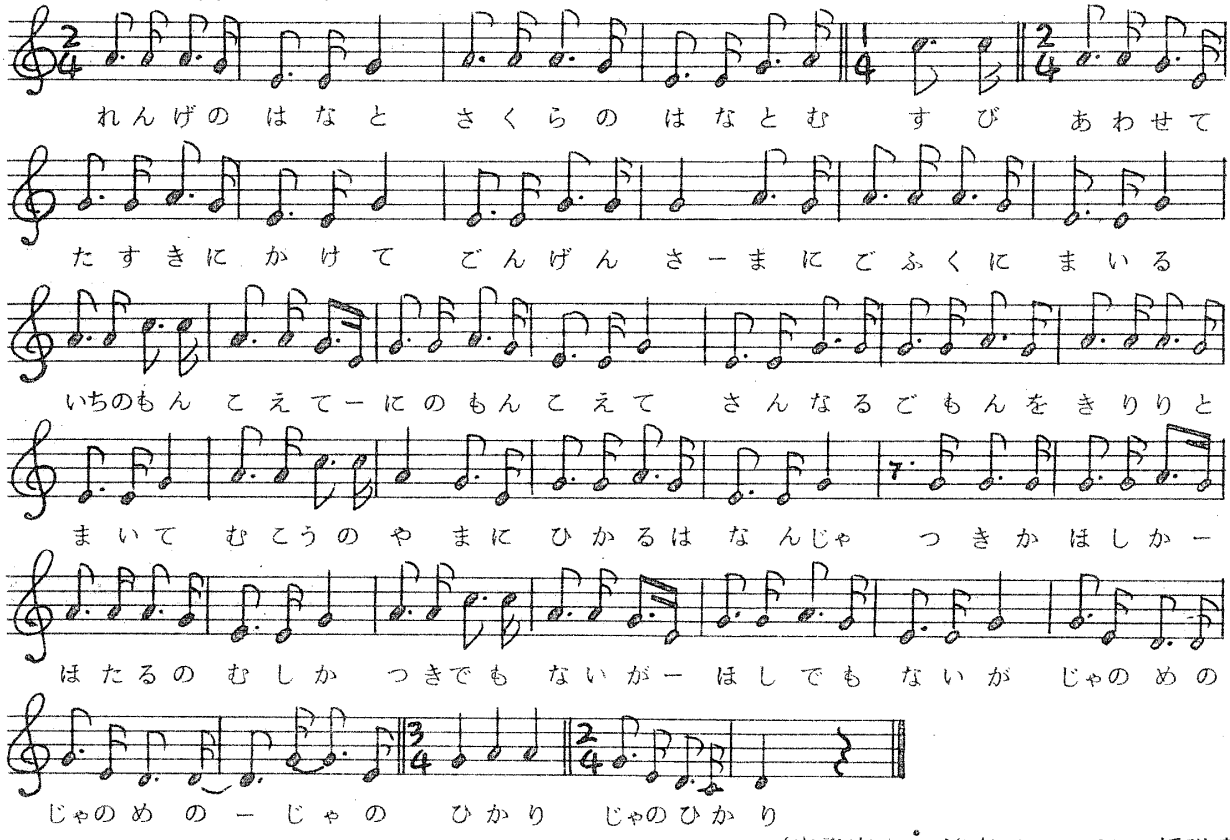
※3…よんべ……ゆうべ

※じんじょの子ども……意味不明，尋常か？演唱者は，上品な子どもと解していたとのこと。

旋法は陽旋法，核音は前半がソ，後半がラである。同歌が門入地区[(8)]，山手地区[(9)]にみられる。さらに，同じ本郷の北村つま氏の歌った同歌[(10)]は「よんべ貰った花嫁が……」以下が，全く違う歌詞が歌われている。一見するに，違う歌がつけ加えられたように見える。

12. れんげの花と桜の花と　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ



（出発実音ト，速度M. M. 120　採譜高木）

歌詞

れんげの花と桜の花と結び合わせてたすきにかけて

権現さまにごふくに参って

一の門こえて二の門こえて，三なる御門をきりりとまいて

向こうの山に光るは何じゃ，月か星か蛍の虫か

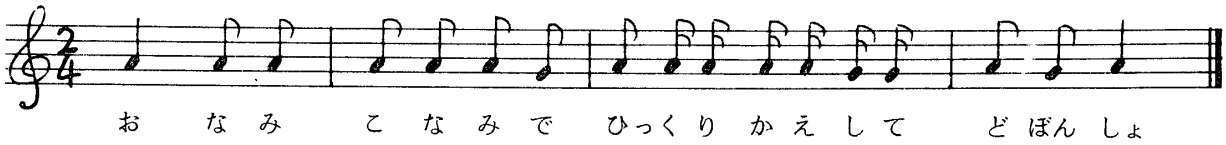
月でもないが星でもないが

蛇の目の蛇の目の　蛇の光蛇の光

このうたは，第Ⅰ報でも北村つま氏より採集し報告した。(P54. 5. れんげの花と桜の花と,P.60 楽譜5),旋法，類歌等は省く。旋律，詞ともほとんど同じであるが，今回の斉藤みのえ氏のうたは，前出のうたにくらべ，フレーズ間の休符がほとんどなくなっている。斉藤みのえ氏のうたはこのうたに限らず，ほとんどのうたがフレーズ間の休符がないというのが特徴的である。

12.　おおなみこなみ　（縄とび唄）

演唱者　北村秀子



（出発実音二速度M.M. 60　採譜高木）

歌詞

おおなみこなみで

ひっくりかえって　どぼんしょ

全国的に最も有名な縄とびうたの一つで，現代の子ども達の中でもいろいろな形で歌われている。遊び方は「おおなみこなみで」までは縄を左右に揺らしそれを跳び，「ひっくりかえってどぼんしょ」の部分では大きく廻し，最後に股の間に縄をまたいではさみ止める。またぎましょ型の縄とびである。

旋律は極めて単純な，ソ，ラの二つの音を使ったもので核音はラである。

ちなみに，同期間中に採集した本郷地区の子どものわらべうた「おおなみこなみ」は旋律も，詞も，もっと変化があり，曲も詞も大へん美しいものであった。

おおなみこなみで　雪の降る晩に

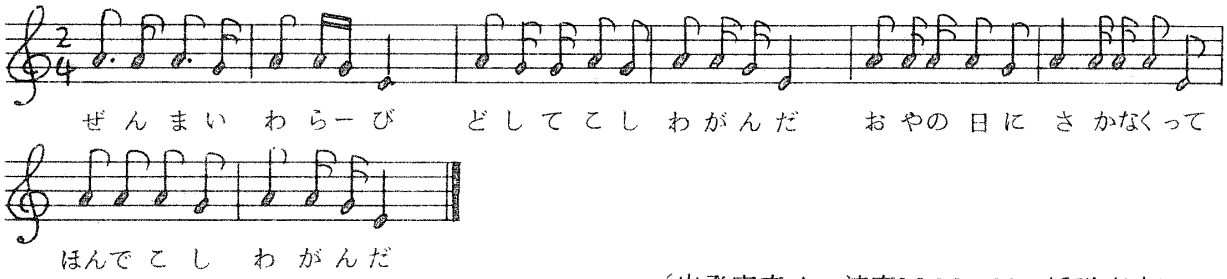
誰か一人であっちを向いてこんにちは

こっちを向いてこんにちは

ひい，ふう，みい，よう……

13.　ぜんまいわらび　（鬼あそび唄）

演唱者　江口いとえ



（出発実音イ，速度M.M. 96　採譜高木）

歌詞

ぜんまいわらび　どして腰わがんだ※

親の日にさかな食って　ほんで腰わがんだ

※わがんだ……曲がった

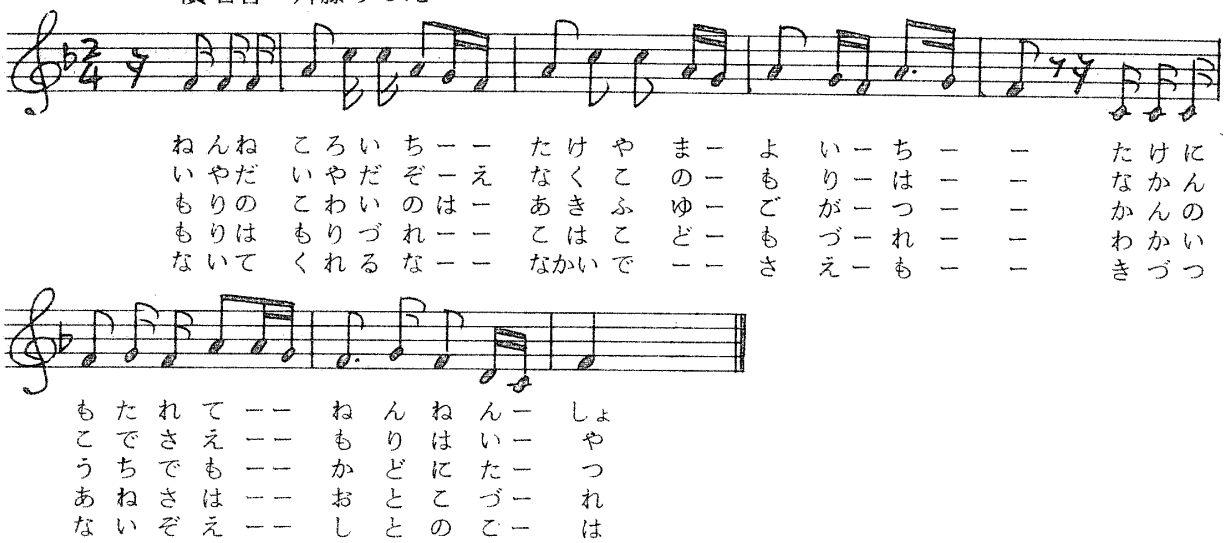
この曲の旋法は，ミ，ソ，ラのテトラコードで核音はラである。

このわらべうたのあそびは，本来は「坊さん坊さん」と同様の鬼あそびであるが，演唱者自身，子どもの頃その様なあそびをした覚えはないとのこと。ぜんまいとりに行って，あるいは腰の曲がったお婆さんを見てはやしたてた覚えがあると語った。

同歌が戸入地区に[11]も見られ，旋律的にもほとんど同じである。詞が，「わがんだ」の部分が「ゆがんだ」に，「親の日に」が「親のおたや（お逮夜）」と変っているだけで，意味は全く同じである。また，本郷地区の他の人が歌った同歌[12]も詞は全く同じで，旋律も大差ない。類歌としても同村他地区に見出され，「中の中のこぼとけ，なぜ背がひくなった，親の日にとと食って，それで背がひくなった」の詞で，山手，戸入，門入[13]等にみられる。

14. ねんねころいち　（子守唄）

演唱者　斉藤みのえ



（出発実音嬰ヘ　速度 M.M. 63　採譜高木）

歌詞

ねんねころいち　たけやまよいち
竹にもたれて　ねんねんしょ

いやだいいやぞえ　泣く子の守は
泣かん子でさえ　守はいや

守のこわいのは　秋，冬，五月
寒のうちでも　門（かど）にたつ

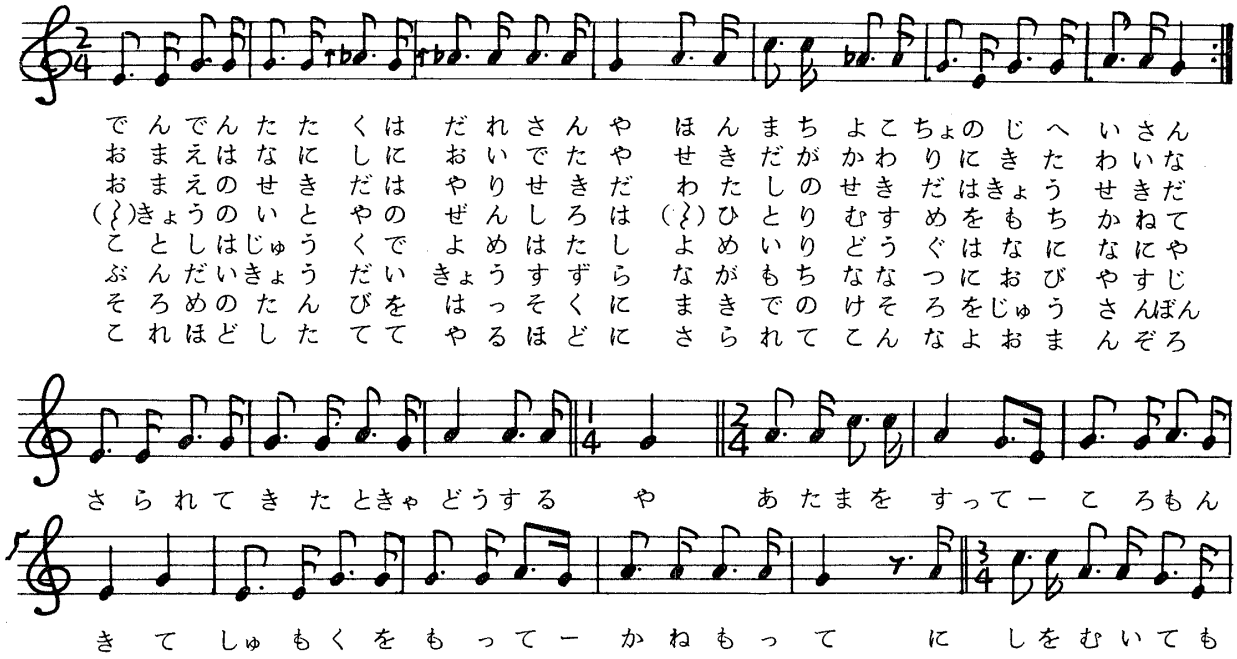
守は守連れ　子は子ども連れ
若いあねさは　男連れ

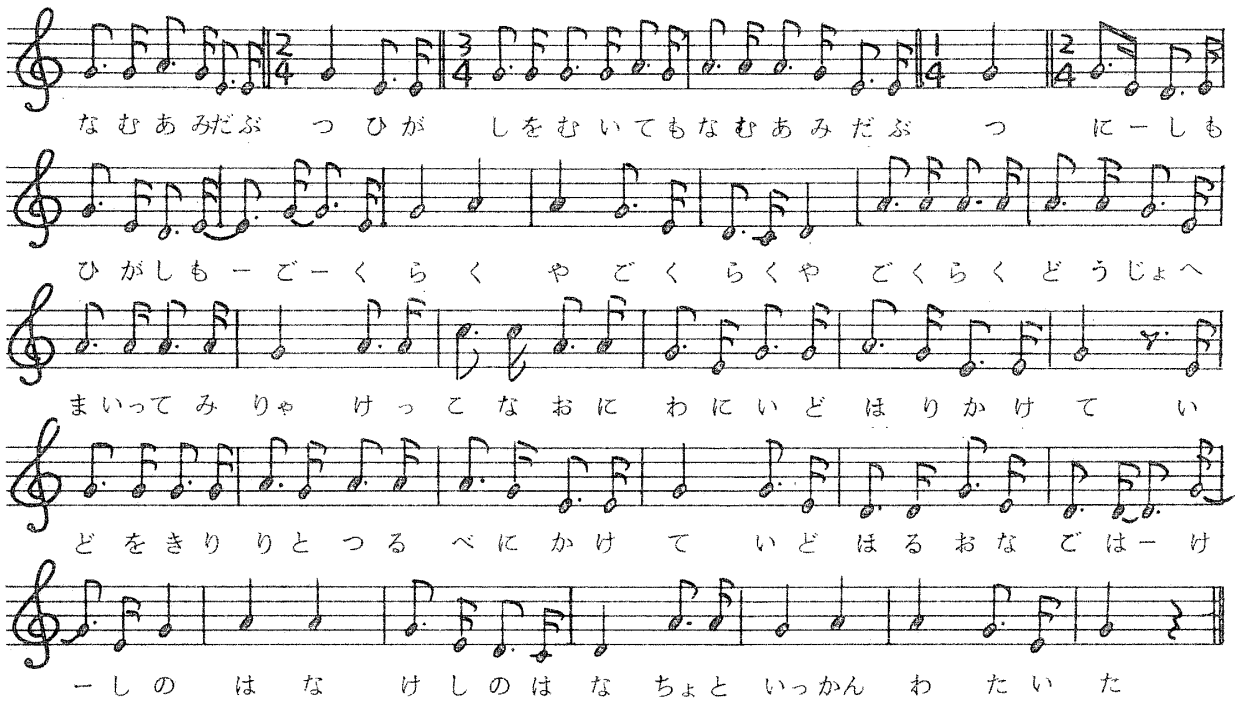
泣いてくれるな　泣かいでさえも
気づつないぞえ　しとの子は

初めての子守唄である。旋法は，ド，レ，ミ，ソ，ラ，の典型的な呂旋法。核音は，ド，ソである。同歌として，同村他地区の門入，戸入，本郷，山手で採集[14]されている。そのほとんどが8分の6拍子で採譜されているが，斉藤みのえ氏が歌ったこの子守唄は，いか様に聞いても6拍子には聞き得なかった。旋律に大きな違いはないが，詞にはそれぞれ一節づつ種々の詞があるものと思われる。

15. でんでんたたくは　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ





（出発実音嬰ハ　速度M.M　126　採譜高木）

歌詞

でんでんたたくは誰さんや　本町横町の治兵衛さん
おまえは何しにおいでたや　雪駄（せきだ）がかわりにきたわいな
おまえの雪駄はやり雪駄　わたしの雪駄は京雪駄
京の糸屋の善四郎は　一人娘をもちかねて
今年は十九で嫁はたし　嫁入道具はなになにや
文台鏡台京すずら　長持七つに帯八すじ
そろめのたんびを八足に　まきでのけそろを十三本
これほど仕立ててやるほどに　去られてこんなよおまんぞろ
去られてきたときゃどうするや
頭をすって衣ん着て　撞木（しゅもく）をもって鐘持って
西を向いてもなみあみだぶつ　東を向いてもなむあみだぶつ
西も東も極楽や極楽や
極楽どうじょへ参ってみりゃ　けっこなお庭に井戸掘りかけて
井戸をきりりとつるべにかけて　井戸掘る女子（おなご）はけしの花けしの花
ちょと一かんわたいた

この曲も，第Ⅰ報で報告した北村つま氏の歌った「でんでんたたくは」と同歌である。（P.52.3.P59. 楽譜3）ここでは異なるところを指摘するにとどめる。

旋法は，ド，レ，ミ，ソ，ラ，の呂旋法と考えられるが，上行の際のラの音は1全音まで上りきら

ないあいまいな音である。詞は，北村氏のうたと比較して，変化している部分が数箇所数えられる。前項が北村氏

お前の雪駄は安雪駄⟶ やり雪駄

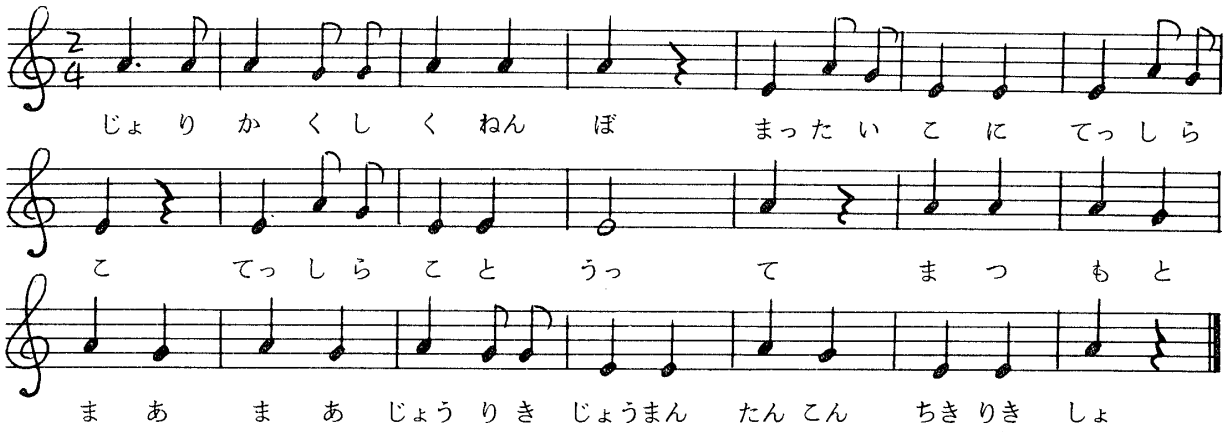
井戸は切石つるべはこがね⟶ 井戸をきりりとつるべにかけて

水くむ女子⟶ 井戸掘る女子

逆に，北村氏のうたの方が欠落していると思われる部分が斉藤氏では「撞木を持って鐘持って」と補なわれている。しかし，極楽浄土を「極楽どうじょ」と云いなまっている部分は，やはり斉藤氏も同様に「極楽どうじょ」と歌っているのは特徴的である。伝承の面白さといえる。ちなみに，北村氏の方が14才の年長である。

16. じょりかくし　（鬼あそび唄）

演唱者　斉藤みのえ・斉藤ひろえ



（出発実音嬰ヘ　速度M.M.　112　採譜高木）

歌詞

じょりかくしくねんぼ

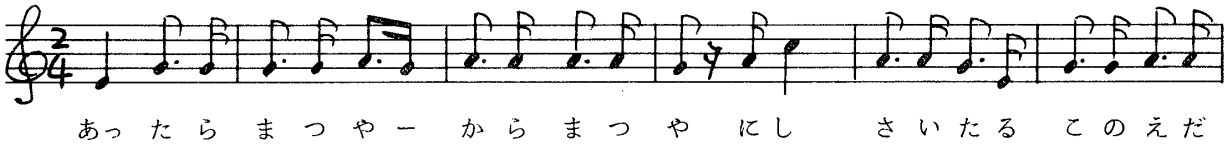
まったいこに　てっしらこ　てっしらことうって

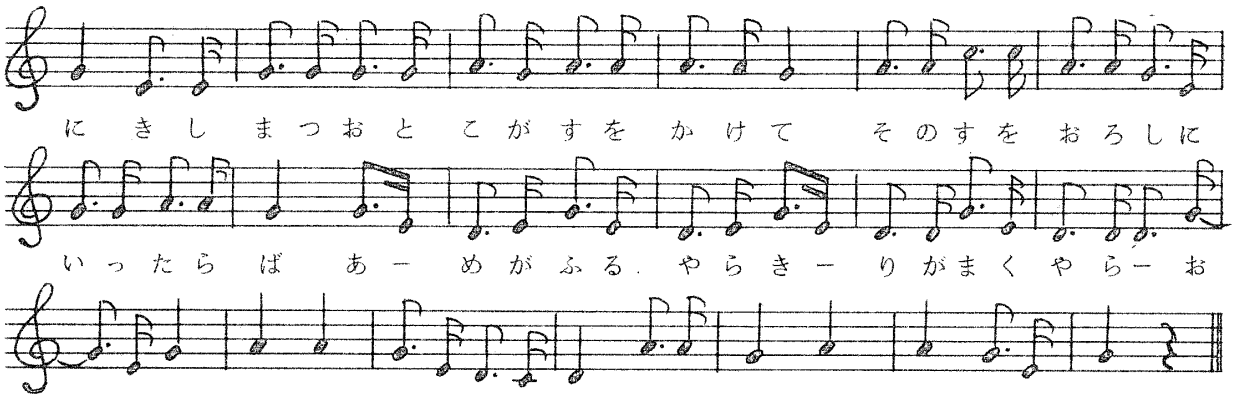
まつもとまあまあ　じょうりきじょうまん　たんこんちきりきしょ

第Ⅰ報「4.じょりかくし」（P. 54. 楽譜4. P. 60.）と同歌である。詞は全く同じであるが，旋律は，北村氏のうたがソ，ラの二音列のみであるのに対し，斉藤氏の方が変化に富み，ミ，ソ，ラの三つの音を使ったテトラコードである。核音はラ。

17. あったら松やから松や（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ





（出発実音嬰ハ　速度M.M.120　採譜高木）

歌詞

あったら松やから松や　西に差いたるこの枝に

きしまつおとこが巣をかけて　その巣を下ろしに行ったらば

雨が降るやら霧がまくやら　おれなんだおれなんだ

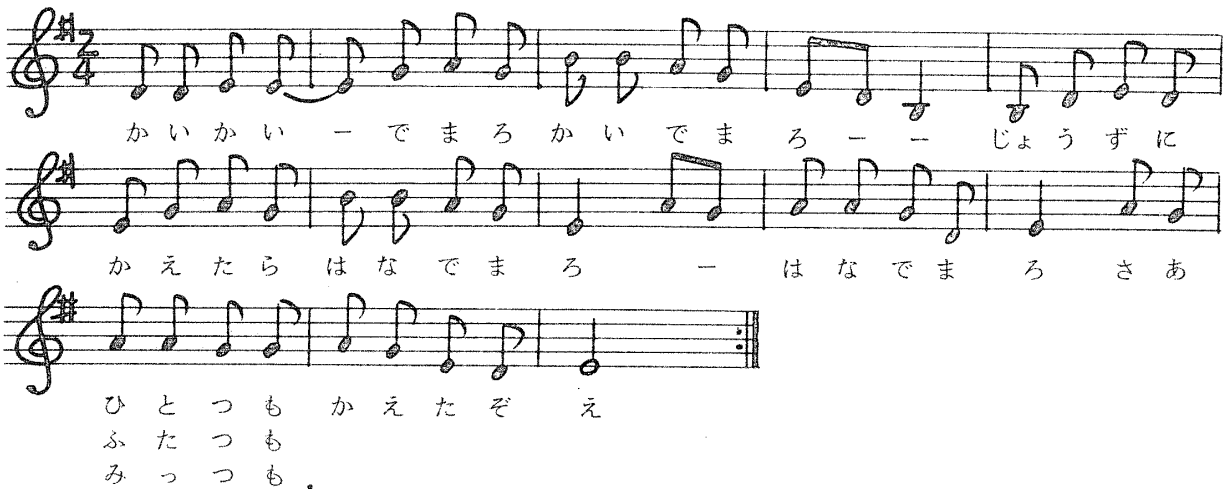
ちょと一かんわたいた

第Ⅰ報「1，あったら松やから松や」（P，50，演唱者，山本花枝，戸入，P，51，楽譜1）と同歌である。

旋法は呂旋法である。山本氏のうたが陰音列で歌われたのに対し，斉藤氏は陽音列で歌っていたのが大きな違いである。詞の違いはほとんどなく，あってもほんの些細なものである。

18. かいかいでまろ　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ



（出発実音変ホ　速度M.M.　132　採譜高木）

歌詞

かいかいでまろかいでまろ

上手にかえたらはなでまろはなでまろ

さあひとつもかえたぞえ

以下「ひとつ」と歌う部分が「ふたつ」「みっつ」と「とお」までくり返す。

この曲は，徳山村では過去に一度も採集されていない全く新しいわらべうたである。岐阜大学教育学部編「郷土資料」にも採録されていない貴重な資料が発掘出来た。

旋法は，ミ，ソ，ラ，ド，レの陽旋法，核音はミ，ラである。リズムも一箇所のシンコペーションを含み，変化に富んだ面白い曲である。

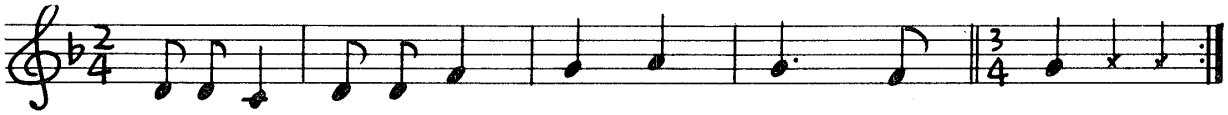
詞は，全体の大意は不明，演唱者自身も，意味は分らず歌っていた。

あそびは，糸まき手まりを両手で交互についで遊んだ。元来は手まりをお手玉の様に上に揚げて遊ぶ「揚げ手まり」[15]の歌であるが徳山ではまりつき唄として遊んでいる。

徳山村内他地区での同歌，類歌は今後の調査に待つ他ないが，全国的に類歌を探すと，古くは江戸時代の三河地方に，その他，京都，徳島，島根，広島，長崎など近畿地方より西に分布している。[15]一例をあげると「かえかえお手まり，かえ手まり，ここで一つにかえて見しょ，ちょっとかえて見しょ」[15]（徳島）

19. すすれすすれいっぱいすすれ　（てまり唄）

演唱者　斉藤みのえ



すすれ	すすれ	いっぱい	す	す	れ（ここで動作する）
いっぱい	すすたら	おはぐろ	つ	け	よ（　〃　）
おはぐろ	つけたら	くちべに	さ	せ	よ（　〃　）
くちべに	さいたら	おしろい	つ	け	よ（　〃　）

（出発実音ニ　速度M.M.　116　採譜高木）

歌詞

すすれすすれ　いっぱいすすれ

いっぱいすすたら　お歯黒つけよ

お歯黒つけたら　口紅させよ

口紅さいたら　おしろいつけよ

未完，思い出せないとのこと。

この曲の旋法は，ソ，ラ，ド，レの四つの音を使った陽旋法の一部で，核音はラ，レである。詞は，尻とり的に先へ先へと進んでいくもので大意は理解出来る。惜しいことに途中までで，いずれ完成させたいものである。

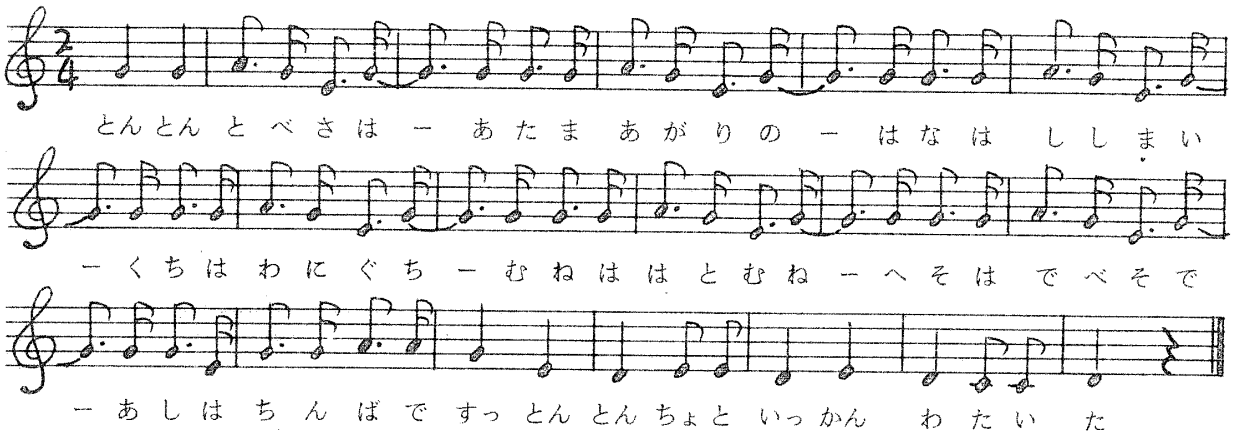
遊び方の特徴は，手まりをつきながら，1フレーズ毎の最後に，「すすれ」「お歯黒つけよ」「口紅させよ」「おしろいつけよ」のそれぞれの動作をするにある。

同歌は，同村門入地区[16]，山手地区[17]に見出すことが出来る。

＜戸入地区のわらべうた＞

20. とんとんとべさは　（てまり唄）

演唱者　増山たづ子・山本花枝



（出発実音ト　速度M.M.　104　採譜小川）

歌詞

とんとんとべさは　（とんとんとめさは）

※頭あがりの　鼻はししまい　（頭あがりで鼻はししばな）

口はわに口　胸ははと胸

へそはでべそで　足はちんばですっとんとん

ちよっと　一かんわたいた

（　）内は山本花枝氏

※頭あがり……福録寿の様に頭が長いこと。

この歌は，人の身体の欠点ばかりを上から下まで順にこき下ろす苛虐的な歌である。囃し唄の中には間々みられることであるが，てまり唄ではめずらしい。

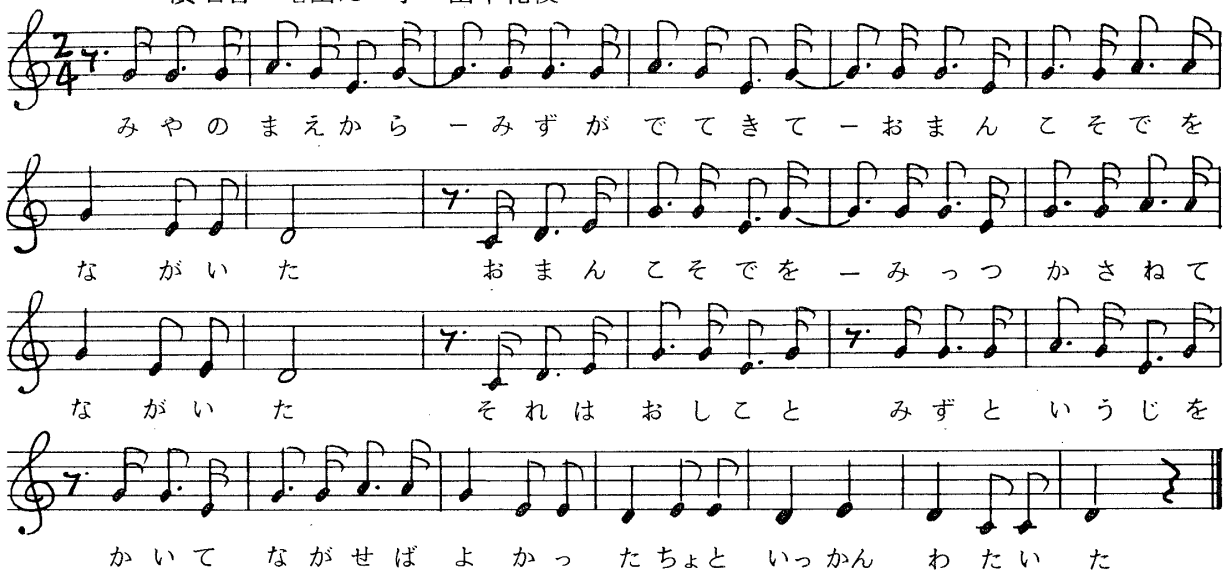
旋法は，レ，ミ，ソ，ラ，ドの音列を使った陽旋法で，核音は前半がソ，後半がレとなっている。リズムもメロディーも同じ型をくり返すオスティナートとなっている。

二人に歌って貰ったところ，旋律は同じであったが，詞において些細な所で部分的な違いが見られた。

類歌として，てまり唄ではこの類の歌は見られないが，遊ばせ唄の中に，身体の部分を詞の中に折り込んでゆく，例えば，「愛宕（あたご）さ参って（頭）下谷を通って（額）毛虫坂下りて（眉）目黒をまわって（目）花屋へよって花一本折って（鼻）ほうぼうで叱られて（頬）……以下略[18]」というようなものは全国的に見出すことが出来る。しかし，本曲の様な悪口的，苛虐的なものはあまり見出せない。

21. みやの前から　（てまり唄）

演唱者　増山たづ子・山本花枝



（出発実音ト　速度M.M.　104　採譜小川）

歌詞

みやの前から　水が出て来て

おまん　小袖をながいた

おまん　小袖を　三つ重ねてながいた

それは惜しこと　水という字を書いて流せばよかった

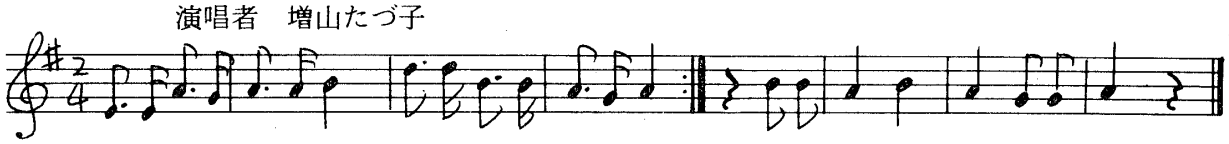
ちょっと一かんわたいた

この曲は，前曲20，「とんとんとべさ」の類似曲である。詞の違いから旋律も前曲にくらべ，音の構成も広くなり変化に富んでいる。旋法は，レ，ミ，ソ，ラ，ドの音列を用いた陽旋法で，核音はソ，レ，である。

1972 年，林友男氏により調査されたわらべうた[19]にみられる，同じ戸入地区における同じ演唱者によるこの曲は，一つの曲として採集されている。今回，私たちの調査で，「とんとんとべさ」と「みやの前から」は，それぞれ独立した全く別のてまり唄であることが，演唱者から訂正され，確認出来た。両曲とも，メロディー，リズムなど音型が酷似しているため，この様なことが起ったことは想像に難くない。大きな収獲であった。

22. いっちょめのぶんど　（てまり唄）

演唱者　増山たづ子



一ちょうめのぶんど　二もんめのぶんど　ちょと　いっかん　わたいた
三もんめのぶんど　四もんめのぶんど
五もんめのぶんど　六もんめのぶんど
七もんめのぶんど　八もんめのぶんど

（出発実音ロ　速度M.M.　108　採譜小川）

歌詞

一ちょめのぶんど※　二もんめのぶんど
三もんめのぶんど　四(し)もんめのぶんど
五もんめのぶんど　六もんめのぶんど
七もんめのぶんど　八もんめのぶんど
九もんめのぶんど　十もんめのぶんど
ちょいと一かんわたいた

※ぶんど……分銅，ここでは拍子言葉

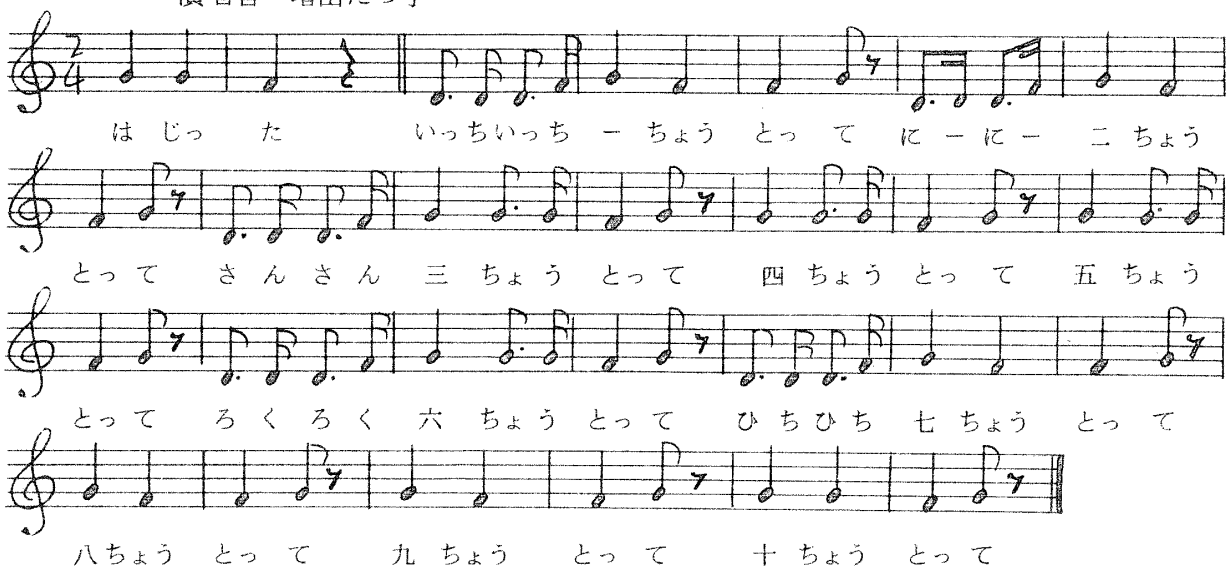
この曲も，レ，ミ，ソ，ラ，ドの音列を使った陽旋法で，核音はこの場合はレ，である。この曲は，単純に1から10までの数を積み上げていくもので，旋律も，詞も同型のくり返しで極めて単調である。

最初の詞だけが「一ちょうめ」であり、「二もんめ」以下すべて「もんめ」であることから，最初も，本来は「一もんめ」であったことが想像される。「一もんめのぶんど」すなわち「一匁の分銅」であり，それを積み重ねて最後に「一貫わたいた」で，詞の大意は理解出来る。

同歌は，過去に於て同じ戸入で採集[20]されており，最後の「ちょいと一かんわたいた」の部分のみ旋律が違っている。類歌は全国的にてまり唄として見出すことが出来る。

23. はじった　（おはじき唄）

演唱者　増山たづ子



（出発実音ト　速度M.M. 92　採譜小川）

歌詞

はじった
いちいち一ちょうとって　にーにー二ちょうとって
さんさん三ちょうとって　しーしー四ちょうとって

ごーごー五ちょうとって　ろくろく六ちょうとって
ひちひち七ちょうとって　はちはち八ちょうとって
くーくー九ちょうとって　じゅうじゅう十ちょうとって
ごいっとせ

この歌は，おはじき遊びに付随して歌うものである。「はじった」と歌いながら，手に持ったおはじきをすべてばらまき，まず，二つのおはじきの間を指で線を引き，他のおはじきに当らない様打ち合うのである。この動作の中で「いちいち」は一つのリズムで，省略する場合もある。おはじきがあるだけすべてとってしまった時，「ごいっとせ」というのである。途中で失敗することの方が多く，次の人がまた最初から始めるのである。

ド，レ，ファ，ソ，ラの律旋法を使った曲で核音はソである。レ，ファ，ソ，の三つの音からなり，オスティナートで数を読み上げていく。

同村門入地区にも同歌(21)があり，最初の出だしが違うぐらいで，順に数をつみ上げていく方法は全く同じである。

Ⅲ

＜わらべうたの伝承について＞

第Ⅰ報で課題としてあげた，①同一曲を複数の人から採集する。さらに，②世代の異なった人から採集する。という点からいえば，第２回目の調査結果から，少しは達成出来たと思われる。

伝承の形態については，それを左右するさまざまな自然的条件，人為的条件が考えられようが，ここでは，地域の違い，世代の違いという二つの例をとり上げて，比較・検討し，一つの考察を試みることとする。

その１）

てんまるやてんまるや　油とろとろびんとろとろで
七つ八つから紅おしろいで　おばさんところへあすびに行ったら
お若い衆やらこ若い衆に抱きとめられて
お乳が痛いで離しておくれ　離せんけれども
お盆が来たで帯買っておくれ　赤いがよいか白いがよいか
ちょうせんばやりの博多帯　博多帯
ちょいと一かんわたいた

演唱者　門入　清生しな氏

このわらべうたと，本稿９，「こっから見えるは」を比較してみると，旋律は，ほとんど大差なく，詞に於て，歌い出し部分が，「てんまるやてんまるや」が，「こっから見えるは名古屋やないか，名古屋子どもはじんじょの子ども」に置きかわっているだけで，以下後段はほとんど同じである。類歌というより同歌というべきであろう。

地域的に本郷と門入とは，間に戸入をはさんで16kmの隔たりがある。間の戸入地区にも同歌があろうことは想像出来るが，未だ採集されていない。当時の子どもの足でこれだけの隔たりを越えて交流出来たとは考えられず，いかなる形にせよ，大人による人為的介在があったものと思われる。

その２）

本稿15,「でんでんたたくは」の項で指摘した如く，斉藤みのえ氏のうたと，北村つま氏のうたとの比較である。年令からいうと北村氏の方が14才の年長である。したがって，この場合，北村氏のうたを原型として比較してみることとする。

原　型		変　化
お前の雪駄は安雪駄	⟶	お前の雪駄はやり雪駄
井戸は切石つるべはこがね	⟶	井戸をきりりとつるべにかけて
水くむ女子は	⟶	井戸掘る女子は
極楽どうじょに	⟶	極楽どうじょに

上記の如く，三項は明らかに変化して，歌詞全体の意味からは解しにくくなっている。そして四項目はそのまま変化しないで伝わっている。同村山手地区のうた[22]では，はっきり「極楽浄土へ参ってみりゃ」と歌っているのからして原型のあやまりが，そのまま伝えられているのがわかる。そこで考えられることは，年令の違いから，子どもの頃に両者が一緒に遊ぶことはなかったはずであるから，両者の年代をうめる子どもを介在として伝わるうちに変化したであろうことは想像に難くない。また，云い難い言葉は，云い易い言葉に云い変えられてそのまま伝えられるということも容易に想像がつく。例えば，こんなことがあった。「あんたがたどこさ」のうたが５才の子どもに「あんたなんかどこさ」とうたわれているのを耳にした。「複数」が理解出来ない子どもにとってそれを修正するものが居なければ，身近かで理解出来る言葉で覚えてしまうのは当然である。このことからも云えるように，徳山村には，各地区に道場というものがあり，宗教行事や，村の行事，子どもの遊び場，たまり場として身近に道場というものがあったから尚さらのことであろう。このことから伝承の形態を考えてみると，山手地区の場合は，修正者 ＝ 年長者・大人の介在があったとも云えるし，本郷の場合はそれがなかったと推測することも出来る。

以上二つの例を引き出して，検討してみたが，まだまだ資料の少ない段階で，わらべうたの伝承について考察をすすめることは，冒険であり危険でさえある。さらに調査を深め，資料を収集する必要がある。

＜まとめ＞

今回の調査では，多くの成果を得ることが出来た。

その第一は，予想を超えるはるかに多くの曲を採集出来たことである。本郷・戸入地区で18曲，本稿では報告出来なかった門入地区の分も含めれば24曲にも達し，前回採集曲の４倍以上にものぼる。

第二は，その中に，過去に於て未採集の新曲を，私たちの手で採集することが出来たことである。このことは，徳山村という限られた地区だけでも，まだまだ多くの忘れさられようとしているわらべ

うたが残されているということを如実に物語っている。

さらに第三には，前回調査の時の伝承者とは年代の異なる伝承者から採集出来たことである。このことは，伝承の形態を考察する上に貴重な素材となった。

その第四は，子どもの頃一緒に遊んだ同年代の複数の伝承者から採集出来たことである。同一曲でも，複数の人からの採集で，当時のうたのより正確な再現が果され得るということである。

第五に，母と娘という関係の伝承者から，同時的に採集出来たこと。そのこと自体，一つの伝承形態を示し，一つの証明を与えてくれている。

第六には，これらの伝承者と深くかかわることによって，私たちの徳山村における調査研究活動の発展が期待されることである。あの地域では誰それに会え，そのことが聞きたければ誰それに聞くといい，という具合に自分の知己を沢山紹介してくれたことである。

以上述べた如く，今回の調査では，貴重な成果が得られたが，さらにこの伝承わらべうたの分布，伝承形態の研究をすすめ，深めるために，今迄の様に手あたり次第に集めてくるということだけではなしに，例えば，戸入地区で，「でんでんたたくは」というううたを掘り起すという具体的な目標をもって，目的意識的に調査に入るという必要性が出て来た。

こうした点をふまえ，今後の課題として，この研究を続けてゆきたいと考える。

― おわりに ―

今回の調査報告をまとめるにあたって，協力頂いた方々に深く感謝する次第である。

第Ⅰ報の執筆者のひとり木戸季市氏には，今回の調査には参加されなかったが，本稿をまとめるにあたって，討論に参加頂き，貴重なご意見を頂いた。

小島好江氏には，京都からこの調査に参加され，採集活動の中で，さまざまなアドバイスを頂き，協力頂いた。

また，斉藤一雄氏をはじめ，斉藤みのえ氏，斉藤ひろえ氏，江口いとえ氏，北村秀子氏，増山たづ子氏，山本花枝氏の，現地の話者・演唱者諸氏には，一方的に迷惑も省みずおしかけ，採集に協力頂いたこと，ここにあらためて深大なる謝意を表したい。

（1979，10，12　受理）

注

(1)岐阜大学教育学部編　郷土資料　(5)　岐阜県のわらべうた今昔　徳山村篇　P55，楽譜　(4)

(2)　同　上　　P．55，楽譜　(5)

(3)　同　上　　P．57，楽譜　(8)

(4)社会思想社刊　尾原昭夫編著　日本のわらべうた　室内遊戯編　P．197，198

(5)岐阜大学教育学部編　郷土資料　(5)　岐阜県のわらべうた今昔　徳山村篇　P．67，楽譜　(33)

(6)　同　上　　P．56　楽譜　(7)

(7)　同　上　　P．55　楽譜　(5)

参　考　文　献

(8) 同　上　P.P. 58　楽譜　(11)

(9) 同　上　P. 59　楽譜　(12)

(10) 同　上　P. 59　楽譜　(13)

(11) 同　上　P. 78　楽譜　(78)

(12) 同　上　P. 78　楽譜　(77)　(79)

(13) 同　上　P. 77　楽譜　(74)　(75)　(76)

(14) 同　上　P. 71　楽譜　(45)　(46)

P. 72　楽譜　(47)　(48)　(49)　(50)

(15)社会思想社刊　尾原昭夫編著　日本のわらべうた　室内遊戯編　P. 210　「かえかえてんまり」

(16)岐阜大学教育学部編　郷土資料　(5)　岐阜県のわらべうた今昔　徳山村篇　P. 65, 楽譜　(28)

(17) 同　上　P. 65　楽譜　(28)

(18)社会思想社刊　尾原昭夫編著　日本のわらべうた　室内遊戯編　P. 32, 33,

(19)岐阜大学教育学部編　郷土資料　(5)　岐阜県のわらべうた今昔　徳山村篇　P. 62　楽譜　(20)

(20) 同　上　P. 66　楽譜　(30)

(21) 同　上　P. 69　楽譜　(38)

(22) 同　上　P. 53　楽譜　(2)